

CAROWAA

CAROWAA —ちやろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

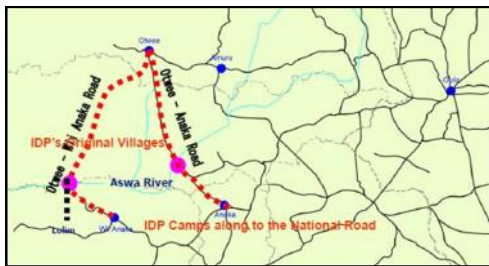
JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



特集

「アムル県総合開発計画策定支援プロジェクト」 進捗状況



「アムル県総合開発計画策定支援プロジェクト」(通称「道路プロジェクト」)では現在、パイロットプロジェクトとしてアムル県2サイトの道路、橋梁の新設・改修を実施しています。このようなインフラ整備は地域開発において不可欠ですが、つい数年前まで紛争状態にあったため、行政も十分に機能しておらず、

明確な土地登記システムもないこの地でプロジェクト開始にこぎつけるまで、現場ではいくつもの困難がありました。

今号では道路プロジェクトの進捗とともに、グルオフィスやコンサルタントチーム(通称「道路チーム」)による現場での動き、その苦勞などもお伝えしたいと思います。

土地問題への対応

総合開発計画プロジェクトでは、プロジェクトの対象地域であるアムル県を南北に寸断しているアスワ川に実証事業として橋梁をかけることにより、帰還・定住の促進、開発促進への効果を確認するとともに、今後ウガンダ北部で実施が想定される無償資金協力による事業実施のための留意事項・課題の抽出、調達・施工事情の把握および平和の配当を地域住民に早期に示すことなどを目的として、2か所の橋梁の架け替え新設工事、その前後の道路改修工事を計画した。

1か所は地元の住民たちが協力して丸太をつなぎ合わせて作った、人と自転車だけが通ることができる簡易な橋(橋梁1)、もう1か所は70年代に建設されたものの、20年にわたる内戦のために維持管理がされずに放置されていた橋(橋梁2)である。

最も頭を悩ませた土地問題は、橋梁2の建設準備を進める際に浮上してきた。

そもそもアムル県側によれば、対象となる橋梁は「県道上に位置する」との前提であったが、プロジェクトの準備を進める中で、橋梁をつなぐ前後の道路は個人地主の土地の一部を通っていることが判明したのだ。新しい橋梁は既存の橋梁から約20m下流に建設が予定さ



写真上: 橋梁1
写真下: 橋梁2



れているため、新橋梁への取り付け道路を300m程度新設する必要がある。

そこから、この地域で起きている土地問題の一つが浮き彫りになってきた。私有地を通る以上、アムル県側がきちんと地権者に説明し、同意書を得ておくべきであったが、それ

らもなされていなかったため、急遽地権者に説明し同意書を取り付けた。

しかし、問題はそこで終わらなかった。

今度は中央政府の建設交通省が、地権者からの道路建設に関する同意書だけでは不十分で、土地の所有権をアムル県側へ移転すべしとの指示があったのだ。中央政府と県側の見解の相違に議論があったものの、結局そこからさらに地権者に説明し、対象となる土地を県側に無償譲渡する旨の同意書を取り付けることとなった。カンパラ事務所はじめ、道路チーム、グルオフィスも一丸となって早期解決に向けて取り組んだが、この一連の作業に相当の時間を費やしてしまった。

20年以上に渡る紛争の間、治安上必要な道路・橋梁以外の建設がほとんどなかったため、2006年に設立されたばかりのアムル県は行政手続に不慣れであり、軽視する傾向があった。今回の土地問題への対応には大変苦勞したが、今後のわが国のウガンダ北部に対する資金協力を含めた事業展開を図る上で、貴重な経験を得ることもできた。ちなみに、橋梁1、橋梁2とも土地問題は収束し、現在工事が急ピッチで進められている。

交通安全ワークショップの実施

3月下旬から工事を開始するパイロットプロジェクトに先立ち、地域住民に対する工事概要の説明を兼ねた交通安全指導のワークショップを、「橋梁1」工事の対象コミュニティにて3月23日から25日までの3日間で開催しました。グル市内の交通量は多いものの、村落部では自転車かバイクが主要な交通手段のため、工事車両など見たこともない住民が大多数。プロジェクト対象地域で事故が起こらないよう、交通安全への関心を高めてもらうことが目的です。開催場所はパイロットプロジェクトの工事対象地域近くに位置する5つの小学校で、6つの村から合計940名の住民(大人190名、子ども750名)が集合しました。当日は大人と子どもがそれぞれ理解しやすいよう別々のプログラムを用意。プロジェクトを担う道路チームによるパイロットプロジェクト内容、工事期間中の注意事項についての説明、現地NGOからの交通安全講座、そし

て地元警察による交通安全指導が協力して行われました。

地元住民にとって、ポスターサイズに引き伸ばされた写真や絵(現在の橋の写真や本工事で建設される橋のイメージ写真、工事期間中に入りが予想される工事車両の写真など)による説明は斬新だったようで、皆興味津々。質疑応答も活発に行われました。

予想以上に反響があったのがJICA特製交通安全Tシャツ。ワークショップ中に発言をした参加者を中心に配布したのですが、これが大好評。後ろには「交通ルールを知り、道路から離れて遊びましょう」とアチョリ語でメッセージが書かれています。

このような交通安全ワークショップは今後「橋梁2」や平和構築支援無償による協力対象地域でも行っていく予定です。



道路チームからの説明に興味深く見入る小学生



Tシャツをもらい得意な子どもたち

建設会社主催 安全祈願祭

4月16日、パイロットプロジェクトの安全祈願祭が行われました。工事を請け負っているウガンダの建設会社主催の、キリスト教式の安全祈願祭です。

当日はアムル県関係者をはじめ、地元住民も招かれ、グルオフィスからは平井プログラムマネージャーと道路チーム団員が出席しました。

同工事は「橋梁1」「橋梁2」に分かれており、それぞれ、アムル県庁のあるオトウェアナカ間(橋梁1)、オトウェウィアナカ間(橋梁2)を結ぶ道路上にある橋梁の架け替えおよび新設、その前後の道路の改修が主体となっています。現在は、いずれの道路も川で南北が分断され車の通行ができない状態です。川の北側には多くの村々が、南側には複数の国内避難民キャンプがあるため、2つの橋梁の建設は、国内避難民の出身村への帰還、帰還後安定した生活を維持するために必要な農業産品の流通経路の改善、さらには県庁所在地へのアクセスの改善に大きく寄与することが期



架橋位置での神父による安全祈願



日本側代表として挨拶をする平井プログラムマネージャー

待されています。

しかし、長期に渡る紛争の影響が残る地域でのパイロットプロジェクトを実施するにあたっては、施工業者もウガンダ北部でこれだけの規模の類似工事経験がないこともあり、工程管理・品質管理等、チャレンジングな内容が多いことも事実ですが、今後ウガンダ北部にて協力事業を展開していく上で有益な事例としたいところです。

工事は、橋梁基礎の建設が既に始まっており、7月中旬から上部工の建設、12月上旬に完工予定となっています。

また、本工事におけるアクセス道路補修など、特別な技術を必要としない軽作業には、地元住民も労働者として雇用しています。これは人力を主体としたLBT (Labour-Based Technology) と呼ばれる手法で、一時的ではあるものの、コミュニティの人々が現金収入を得られる貴重な機会にもなり、工事期間中は地元住民に対する雇用対策の一環としての役割も果たしています。

今回はようやく進展が見えてきた道路プロジェクトの特集号です。中央政府、県、地権者との調整に現場は東奔西走ならぬ「南奔北走」(カンパラ-グル間)の日々でしたが、なんとか契約、工事開始にこぎつけました。前回のニュースレターから少し間があいてしまい、申し訳ありません。編集を担当している上田企画調査員が熱帯熱マラリアで入院していたため起こった事態です。「一時は死ぬかと思いましたが、おかげさまで元気になりました。これでようやくアフリカの一員です。」(上田)